

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

## 『プレザンス・アフリケーヌ』研究（2）テキスト・思想・運動

2019年度第1回研究会（通算第4回目）

日時：2019年7月27日（土）13:00-19:00, 2019年7月28日（日）10:30-17:00

場所：マルチメディアセミナー室(306)

使用言語：日本語

AA研、科研費（基盤B）「世界文化〈資本〉空間の史的編成をめぐる総合的研究：アフリカ・カリブの文学を中心に」（研究代表者：星埜守之（AA研共同研究員，東京大学）課題番号：17H02328），科研挑戦的研究(萌芽)「人類学的手法を取り入れた黒人文化総合誌『プレザンス・アフリケーヌ』の複合的研究」（研究代表者：佐久間寛（AA研共同研究員、明治大学）課題番号：17K18480）

### 7月27日

1. 中村隆之（AA研共同研究員，早稲田大学）  
「『ダヴィッド・ジョップ詩集』について」
2. 福島亮（AA研共同研究員，東京大学大学院）  
「『ダヴィッド・ジョップ詩集』を読む」
3. 佐久間寛（AA研共同研究員，明治大学）  
「『アフリカ研究』94号の「プレザンス・アフリケーヌ研究」特集について」
4. 全員  
「討論」

### 7月28日

1. 全員  
「打ち合わせ」
2. 星埜守之（AA研共同研究員，東京大学）  
「日本における文学的アフリカ：野間寛二郎を中心に」

### 概要

2019年度第1回研究会を上記の日時および場所で開催した。

1日目は本研究課題に掲げている「テキスト」の共有を目的とする読書会を兼ね、中

村隆之研究員が夜光社より出版した『ダヴィッド・ジョップ詩集』を課題テキストとし、同詩集に関する書評会をおこなった。中村研究員が本書の概要をダヴィッド・ジョップの年譜でもって辿ったのち、福島亮研究員が「『ダヴィッド・ジョップ詩集』を読む」という標題のもと、(1) この詩集が「単なる研究成果ではなく、それ自体として一つの詩集である」こと、つまりは「世代から世代へと受け渡されるべき潜勢体」にしてこの詩人の「資料・証言の集積」であることの確認から始まり、(2) この詩人を日本語で読むという経験をアジア・アフリカ文学運動の系譜のなかで捉え返したのち、(3) この詩を「いま」読むことの実践として「同志たちよ聞いてくれ」の原初的反抗者の形象としての「マンバ」に着目した。福島研究員の報告を受け、出席者がそれぞれ本書にコメントを述べるという仕方で書評がおこなわれた。その後、『アフリカ研究』94号で組まれた特集「プレゼンス・アフリケーヌ研究」について、佐久間寛研究員による概要紹介ののち、本特集の寄稿者である小川研究員、村田研究員より執筆論文の紹介がおこなわれ、自由討論のかたちで、メンバーによる合評がおこなわれた。

2日目は午前中にプレゼンス・アフリケーヌに関する企画本の、編集者を交えた打ち合わせがおこなわれた。その後、午後より星埜守之研究員から「日本における文学的アフリカ：野間寛二郎を中心に」と題した報告をいただいた。本報告は今年度9月末に実施予定のストラスブール大学での国際シンポジウムでの発表原稿を日本語で紹介するものであり、野間寛二郎という一人の書き手のアフリカとの積極的な関わりをつうじて、1960年代から70年代にかけての日本語空間のアフリカ表象のみならず、他者と関わることの倫理を問いかける発表だった。

両日の打ち合わせにおいては、国際シンポジウムの進捗状況、次回の研究会の日程調整がおこなわれた。

今回の研究会における指針を個人的視点からまとめると、『ダヴィッド・ジョップ詩集』に関する福島研究員の情熱的な報告に始まり、星埜研究員の野間寛二郎論で終わったこの2日間は、プレゼンス・アフリケーヌ研究が、狭義の意味での研究——アカデミアの制度で形成された仮構——ではありえないこと、つまりは雑誌に刻印された文字ではなく、その文字から「声」を聞き取ることなくしては、私たちの考える「研究」には値しないのではないかと、と思わせる時間だった。とりわけ「中立の立場はありえない」という野間寛二郎が『差別と叛逆の原点』で書き記した言葉は、ダヴィッド・ジョップの言語と行為に連なる「声」である。

プレゼンス・アフリケーヌが言論媒体として非常に濃度の高い言論空間を提供したのは1950年代である。この50年代とは非常に複雑な状況で物事が多様に動いていた時代である。その複雑さのなかに、じつは「独立の年」という教科書的標語では切り切れない

い数々の可能性があったと考えることができる。それは、中尾世治研究員との議論のなかで佐久間研究員が述べた「潰えたアフリカ」のことである。この「潰えたアフリカ」を言論のなかでまずは現前させることが、この第二期に掲げた「テキスト・思想・運動」の意味するところでもあり、本共同研究の集大成として企画される出版物が、エメ・セゼールに代表される 1950 年代のかれら自身の声＝言葉でもって編まれなければならない所以である。

今回の研究会には初日に 15 名、二日目に 13 名が参加した。

(文責：中村)